



Past and Present

—IAMAS 時代を振りかえって、そして—

安藤泰彦教授
退官記念

Past and Present

—IAMAS 時代を振りかえって、そして…

安藤 泰彦

Past and Present

—IAMAS 時代を振りかえって、そして…

日時：2019年2月9日 17:00 - 18:00

場所：IAMAS R-cafe



最終講義ということで、何を話そうかと色々迷いました。本来なら私がこれまでにアートユニット「KOSUGI+ANDO」として、また「BEACON」制作チームとして制作してきた作品についてお話するのが筋なのかもしれませんが、今回はそれについてはあまりふれないことにしました。作品の話はIAMASの授業の中でかなり詳しく話してきましたし、また作品画像を用いて話すとしても、そもそもインスタレーションにとって最も重要なその場の「空

気感」がなかなか伝わらないからです。幸いこの講義の後の2月21日から3月3日まで実際に作品を展示するので、「作品のことは作品に語ってもらう」ことにしました。

IAMAS在職の12年間で最も時間をかけたこと、それは最も刺激をうけたことでもあるのですが、まずそれについて話すことにします。一つは、学生の修士制作・論文指導にまつわることもう一つは、私が関わった三つの「岐阜おおがきビエンナーレ」です。

作品制作・

論文指導

―指導という名の触発関係

2007年4月に着任した私は、今まで12年間で23人の学生の主査を担当しました。副査を加えると、50人以上の学生の作品制作・論文指導を行ってきたことになります。IAMASにおける主査と学生の関係はある意味「特殊」です。IAMASでは学生の制作・研究の領域が広い上に、修士作品にはこれまでにない形態や新たな視点が要求されます。自分がそれ以前に持っていた知識と経験だけで指導することは難しく、私も学生も共に調べたり、考えたり、悩んだりすることになります。

す。それはある意味、共同作業にも似ているものです。それぞれの学生がどれほどの影響を受けたかは分かりませんが、少なくとも私自身は多くの時間と労力の見返りに、学生から様々な影響や触発を受けたように思います。

せっかくですから、ここで私が担当した20作品、今年度の卒業生の3作品を除いてですが、それらを紹介したいと思います。在学生の制作・研究の指針になるかと思い、少し乱暴ですが、次の五つに大別してみました。

まず、IAMAS学外での作品展示や企画があります。学生が地域・都市と関わる中で企画が生まれてくるものです（井上さおり、津田志保、吉岡留美）。その次は、「私」を取り

巻く身の回りの世界をインスタレーションという形態で見つめ直すような作品（松本和史、永田美樹、山本美里）。三つ目は、機械・装置を用いて人の知覚や動作に注目するもの。機械・装置が人間の知覚を制限したり代行したりします（東谷俊哉、都築透、水無瀬翔、山田聡）。そして、ものと身体との関わりを身体的なインタラクションを通してみせるもの。子どもが能動的に作品に関わるような「遊び」に発展するものもありました（両角佑子、櫻井亮大、増田真英、石原寛介、高見安紗美）。最後のものは、最終的にインスタレーションの形をとることもあります。本質的に平面（写真・絵画）への指向を持つているものです。モチーフへの関心と同時に、画材（メディウム）や表現技術が探求

されています。一方は「動植物解体派」（村山誠、三宅由里子、榎原寿行）、他方は「風景朦朧派」（塚本美奈、嶋田元菜妃）などと名付けたくなります。

これらの作品を学生の関心領域を横軸、表現形態を縦軸として俯瞰すると、表現技術としては既に一般化されたテクノロジーを用いながらも、関心領域は「地域・都市」から「身の回りの空間や生活」、「人の動作や知覚」、そして「動植物の細胞や器官への関心」など、マクロからミクロな視点にまで広がっています。これらは円錐形を比喻として用いれば、テクノロジーの先端部分というよりは、その底部に広がる波紋の輪のような作品群です。しかし作品が向かう方向性や関心は今なお現代的なものであり、改めてもう一度振り返ることのできる作品であると思います。



「岐阜おおがき ビエンナーレ」

―伏線と異物

「岐阜おおがきビエンナーレ」は2004年から2年に一度、大垣市街を中心に開催されてきたアートイベントです。岐阜県、大垣市、IAMASが主催となり、企画・運営をIAMASが行なっています。私が特に積極的に関わったのは、2008年、2013年、2015年でした。2008年は総合ディレクターの小林昌廣のもとに、展示企画「大垣ふうけい論」のディレクターを担当。2013年、2015年は総合ディレクターを務めました。それぞれのビエンナーレの詳細を話すと、とても時間が足りません。ここではあまり表には出てない企画者としての考え、展覧会の伏線のようなものを中心にお話できれば

と思います。

「岐阜おおがきビエンナーレ」に限らず、大きなイベントや企画では、様々な人の思惑や思いが交錯しています。地域活性化などの地元からの要望、「産業の育成をめざす県のIAMASへの眼差し、またメディアアートを唄おうとするIAMASという大学の思い」。それらの思いを大枠では受け止めつつ、それらの声で覆い隠されがちになるものを敢えて提示することを考えていました。それは言い換えれば、周囲から期待されるだろうビエンナーレに対して、「そうではない」「それだけでは」「それではない」と語るような「異物」を混入することでもありました。

展示企画「大垣ふうけい論」 (2008) ―メディアアートに とっての異物

私がIAMASに赴任した翌年に行

なわれた第3回「岐阜おおがきビエンナーレ2008」は「流れる live stream」をテーマに、地理的にも文化的にも、さらには経済的にも、さまざまな人や物資、情報などの多層的な「流れ」の交差点として機能してきた大垣の地に焦点を当てる、というものでした。

その中で私が担当した幾分大きな展示企画「大垣ふうけい論」では、招待作家8名、IAMASアーティストインレジデンスの作家1名、卒業生や在校生5名の合計14名のアーティストに参加してもらいました。一作品につき一部屋の展示空間を確保することを旨とし、市内の12施設16の空間を使いながら、観客が約半日で全てを見て回れるように設計しています。この一人の作家に一つの空間を与えるというコンセプトは、現在岐阜県で募集している「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE

「CUBE」のアイデアにも繋がっているものです。会場として使用したのは、駅前の商店街を中心とする空き店舗や江戸時代から続く老舗店、地下道、ギャラリーなどです。展示場所を探し回るのに、一ヶ月以上かかったかと思います。暑い大垣市内を嫌というほど探し回りました。大垣は、過去と現在の建物が混在しており、見方によっては奇妙なモザイク状の異種混交体（キメラ）のような風景を持っています。その雰囲気展览展示全体として感じられるように、作品によっては廃墟の雰囲気や建物の汚れや傷を残したまま展示を行いました。

これらの展示の中には、例えば、地元、大垣の報道写真家で、失われゆく「輪中」をテーマに記録写

真を撮ってこられた河合孝と現代写真家である真月洋子による展示。デジタル・テクノロジーを使わず、ありふれた日用品や廃棄物を組み合わせて、その場の空氣の動きをとらえるような梅田哲也によるインスタレーション《かざな》。また大垣の人々との会話を美濃和紙に転写した内藤絹子の《祈りの言葉 2008.9》などの展示がありました。これらの展示を見た観客の中には、「あれっ？ これメディアアートなの？」と思った人も多かったのではないのでしょうか。「メディアアート」という言葉が一般にイメージさせるような、ある「限られたテクノロジー」によるアートのイメージに対して幾分窮屈さを感じていた私は、そのイメージに広がりを持たせたかったのかもし

れません。

ビエンナーレはIAMASの外に向けてプロジェクト（投企）するものですが、それはまた投げ入れるIAMAS側にも何らかの反作用を生じさせます。メディア技術を駆使したビエンナーレであるという大枠を保ちつつ、そこに少し違った「異物」を紛れ込ませることで、IAMAS内の学生に向けて、アート表現の多様性や地域・歴史への関心など、表現の広がりを持たせるときつけを与えたいという思いもあつたように思います。

しかし話は逆転してしまいますが、実際これらの作品が地域にとつてはむしろ「異物」ではなく、よく見慣れたもの、関わりやすいものなのかもしれない、とも感じた企画でした。

「LIFE to LIFE 生活から生命くー生命から生活へ」 (2013) — 福島と沖繩の影

総合ディレクターを務めた2013年のビエンナーレは、翌年に移転を控えた領家町にあるIAMAS旧校舎で開催しました。2011年3月11日の東日本大震災の後、私自身が《二番目の埋葬》(2011)《遷移状態》(2011)など福島原発事故にまつわる作品を発表していたこともあり、このビエンナーレにおいても「3・11」を踏まえた表現は欠かせないだろう、少なくとも社会的な問いを投げかけるアート作品を展示したい、と考えていました。そこで、元々は大垣第一女子高等学校の校舎であったIAMAS旧校舎という展示空間の持つ雰囲気、そして東日本大震災後の日本の状況も踏まえ、「LIFE to LIFE 生活から生命へー生命から生活へ」というテーマを立てることに

なりました。テーマにある「生命」は動植物を含めた生物や生態系への人の関わりなど、バイオアートにも繋がるもので、「生活」は人とその回りの日常生活や社会・地域との関わりというような意味を帯びさせています。

校舎の南にあったマルチメディア工房の半地下の回廊に、酪農家の長谷川健一が原発事故後の福島飯館村を撮影した写真を展示し、校舎4階にあるサウンドスタジオには、沖繩県の嘉手納基地および普天間基地周辺においてフィールドレコーディングされた音響を体験する作品《103:1 DB》(前林明次)を設置してもらいました。この半地下の福島と上層の沖繩という二つを空間の間に、「私達がいる場所」として、生活や生命に関わる多様な作品を設置しています。この構成はそれとは明示されてはいない伏線のようなものでした。

展示の中には、大垣に残された8ミリフィルムを発掘して上映した「AHA! Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ」グループによる作品展示や卒業生の井上さおりの《紡ぐー大垣第一女子校の記憶》などの展示があります。

大垣には古くから多くの紡績工場があり、繊維工業は昭和中期に最盛期を迎えます。今は薄れつつある「繊維のまち」大垣の賑わいを生み出していたのが、全国各地から集団就職で集まった中学を卒業したばかりの女性たちです。展示会場となった旧校舎は、このような繊維工場で働く勤労女学生のための昼夜二部制の学校でした。繊維産業の衰退とともに1990年に閉校し、1996年にIAMASとして生まれ変わり、またIAMASのソフトピア移転とともに再び役目を終えることになります。《紡ぐー大垣第一女子校の記憶》は

大垣第一女子高等学校の卒業生を捜し出し、三人の方にインタビューを行なったものです。青春時代について語る卒業生の映像を三つのモニターに個別に映し出し、当時の面影が残る四階の教室を使って、まるで三人が会話をしているような空間をつくり上げていました。このような展示会場自身にある記憶や思い出を引き出すような作品は不可欠であったように思います。

IAMAS という先端テクノロジーの学校の背後にある地域の歴史、そこに光を与える展示は企画者としても重要なものでした。

勿論、展示ではこれらの作品だけでなく、バイオアートや人の生死に纏わるものなど印象深い多くの作品があり

ます。繊維の町とあえて重なるなら、それらの作品から伸びる糸を順に観客それぞれの思いで紡いでいくのが鑑賞の面白さと言えるかもしれません。

「Cracks of Daily Life 日々の裂け目」(2015) — 仮想の広場・仮想の街

2015年にソピアホールで開催したビエンナーレ「Cracks of Daily Life 日々の裂け目」では、予算が限られる中でどのように独自性を出そうかと非常に苦労しました。考えたのが、費用の嵩むパーティションを用いず、ホールの備品である舞台用の台、コンサートなどで使用する段差などを利用して、ホール全体を「仮想の広場・仮想の街」に



見立てることでした。そこでは観客が段差を降りたり舞台上に上がったたりして作品を鑑賞するのですが、ある時間になるとホール全体の照明が落とされ、映画上映やイベントが開催されることになります。野外上映が行われる「広場」のような感じです。

ここでも、前のビエンナーレでも設定した福島と沖縄、その間に「私達の場所」があるという伏線がありました。ホールの一方に福島放射能汚染土を詰めた黒い袋、フレコンバッグをモチーフにした岡本光博のオブジェ《モレシャン》があり、その対極に設置されたスクリーンでは仙頭武則監督の沖縄を題材にした映画『Nothing Parts 71』が上映される。そしてその両

者の間に様々な作品群を配置する。大垣市にある古い看板のタイポグラフィからなる看板群《Typogaki》(ジェームズ・ギブソン+TAB)もその一つで、観客はそれらの看板の隙間から、映画を見ることになります。

このビエンナーレでは、IAMAS教員や卒業生、在校生が、展示作品への参加だけでなくスタッフとして、臨機応変にホール全体の音響や照明を変えたり観客を誘導したりするなどの目覚ましい働きをしてくれました。ある種の共同制作の面白さを感じたビエンナーレでした。



韓国という他者

次に現在の関心事について少し触れます。韓国・朝鮮の近代・現代史と日本との関係、それに関わる表現についてです。

韓国に興味を駆り立てた一因となったのは、主査を務めているIAMASの在学生、アン・セビンのさんの修士作品《Birds in the Veiled World》でした。朝鮮半島の非武装地帯(DMZ)を背景とした、「鳥・環境・人」の混成体(ハイブリッド)状態に対するアート作品で、これまでの学生との関わりと同じように、学生と話をしたり関連書籍を調べたりする中で、自分自身が38度線や南北分断の状況についてあまりにも知らないこ

と、あるいは見過ごしてきたことが多いことに気づかされました。

さらに2018年の11月に釜山、光州の二つのビエンナーレを訪問したことが興味を加速させました。南北の分断を象徴する板門店で韓国・文在寅大統領と北朝鮮・金正恩朝鮮労働党委員長による初の南北首脳会談が行なわれた歴史的な年に行なわれた両ビエンナーレは、釜山が「Divided We Stand(分断された場所、あるいは分断された私たち)」、光州が「Imagined Borders(想像上の境界線)」と、共に境界線をテーマとして開催されました。それは分断された朝鮮、都市化の問題など韓国の抱える様々な問題を社会に問いかけると同時に、参加する各国の作家それぞれの国の状況の問題を浮き彫り

にするようなビエンナーレでした。

その中の一つの作品をあげます。光州ビエンナーレで見た《People I met in open space(オープンスペースで会った人々)》という1990年生まれの韓国人作家Park Hwayeon(パク・ヒョソン)のインスタレーション作品です。噴水らしきものが置かれ、その中にはテキストが書かれた紙が散乱している。設置されたPadには噴水の周りでくつろぐ人々が映し出されて、解説には「光州民主化運動(光州事件)」と表現の証言」と書かれています。

光州事件は1980年5月18日から27日にかけて光州市で起こった民主化を求める大規模なデモです。空挺部隊によって制圧され、150人以上の死者を出したと言わ

れています。日本人にはあまり馴染みがないけれど、『People I met in open space』のモチーフとなった噴水は、光州事件で市民の集会が行われた場所です。韓国では民主化の象徴となっており、教科書にも掲載され、報道や映画などにも度々登場します。この作品や他の多くの作品に触れ、光州事件についてあらためて知る必要があると感じた私は、光州ビエンナーレの鑑賞を中断し、近隣にあった「5・18民主化運動記録館」に向かいました。そこで多くの市民が集まる噴水ばかりでなく、弾圧の状況やその経緯、日本での報道のされ方などについて目にするものになります。

この体験を振り返ってみると、これらの作品を鑑賞するためには、その背景を知ることが

必須であることに気づかれます。一方で、私のように作品を通して光州事件に興味を持つ人も多いのも事実でしょう。ということは、作品自体がその背景を知ることが促す入口やプラットフォーム、あるいはメディア（媒体）としての役割を果たすということでもあります。

韓国から帰国すると、韓国映画『タクシー運転手 約束は海を越えて』や、NHKドキュメンタリー『アナザーストリーズ その時、市民は軍と闘った』韓国の夜明け 光州事件』を手始めに、朝鮮の植民地時代から戦後史に関する映画、小説、評論を読みあさりました。光州事件が火をつけた韓国・朝鮮史への興味が、1987年の6月の民主化抗争、済州島四・三

事件、日本統治時代、慰安婦問題へと次第に広がっていきましました。そして映画・小説などの表現された事物から逆にその時代背景を知り、自分の問題意識を整理してみました。「政治的・社会的なものに対する芸術・アート」「現在の日本を考えるための他者・鏡」としての韓国」「現在の日韓問題への視点」の三つの問題意識です。これらの問題意識が今後新たな作品に繋がっていくかどうかは分かりませんが、むしろ作品以前に、戦後の日本、一見平和で民主的に思える「私達のいる場所」をその過去を振り返りつつ見直すことは、アートの領域に関わらず日本人すべてに課されている問題であるように思います。

退官記念展示

「Sleepless Babies 2019

—眠れぬ子らのために—

—アートの二つの機能

この作品は、2017年1月に、京都、ギャラリー16で展示した作品『Sleepless Babies』（塩田京子氏企画「living will vol.1」）を原型とし、2019年現在の作品として再構成した作品です。この作品は福島原発事故と沖繩の米軍基地という問題を抱えている日本、それとはりもおさず「私達のいる場所」なのですが、それをテーマとするインスタレーションです。具体的には実際に作品を見てもらってからの方がいいと思うので、ここで

は少し作品鑑賞のための前提のようなものを少しお話しすることになります。

この作品を含め、政治・社会的問題に関わるアートには二つの機能があると思います。一つは、先に話した光州ビエンナーレの展示のように、諸問題に対するブラットホームとしての役割です。沖縄、福島、韓国など、様々な場所に多様な問題が錯綜し集積している現代において、アートは問題が錯綜している場所を抉り出し、指示す機能を持っています。しかしそれだけでは、アートの持つ潜在的で特異な力を捨象しかねません。潜在的で特異な力、それはそれらの場所に与えられているイメージや既成概念を揺らし、多層化し、別のイメージと結びつける

機能です。

私たちは常に既成概念やイメージを元にして物事を考えるようにできています。そうした概念枠をよりどころにしなければ考えることができないし、互いにコミュニケーションすることもできません。しかしそれが固定化しすぎると、思考や感情が硬直し対話が「対立」になってしまいます。

アートの素材自体は、本来何も意味しないただの物質です。だからこそ、そこから隠喩（メタファー）や換喩（メトミニー）などイメージの連鎖が生まれます。それは観客がそれらの素材を他の物事に結びつけることを促します。社会的と言われる作品に限らず、アートは固定概念やイメージを揺らし、多重化し、広がります。

さらに言えば、屈折した言い方になります。所謂モダンアートのようにアート表現と社会的フィードバックを分かつ枠組み自体を揺らすことも、アート表現が持つべき機能だとも言えます。この二つの機能は、人間の二つの目のように重要です。二つの目があることで「これは沖縄だが沖縄ではない」とか、「福島であり何処でもない場所である」とか、問題の枠組みをずらすことができます。それはアートでしか表現できない重要な機能ではないでしょうか。今回の私の展示作品も、片方はプラットホーム的な眼差しで、片方はそれをズラし、広げ、イメージを膨らます目で、ぜひ二つの視線で見ただけだと思います。



退官記念展示 「Sleepless Babies 2019 —眠れぬ子らのために」

KOSUGI+ANDO

「Sleepless babies 2019

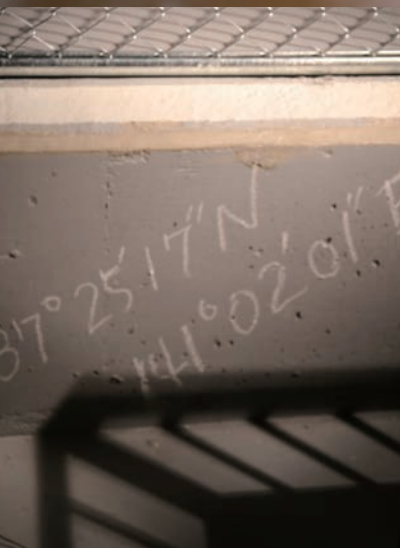
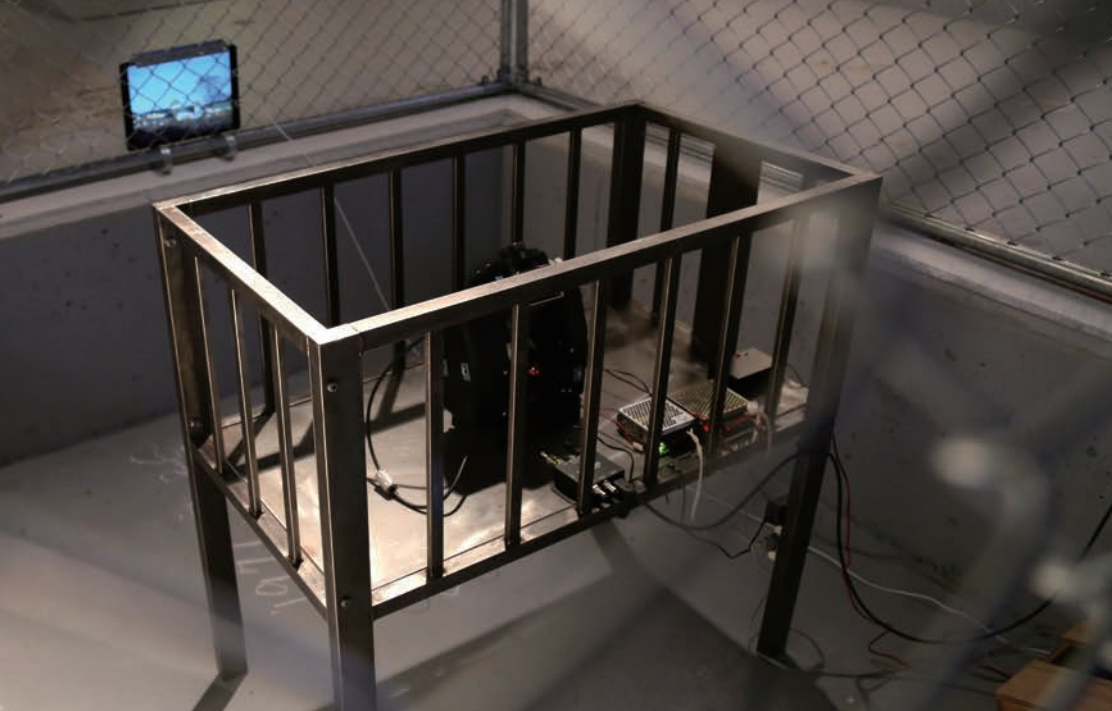
—眠れぬ子らのために—

ソフトピア・センタービル・IAMS ギャラリー 2



KOSUGI+ANDO (小杉 美穂子・安藤 泰彦)

SOUND 協力: 平野 砂峰旅・野間 瞳・安藤 伸彦



アートで考える

三輪 眞弘

情報科学芸術大学院大学 学長・教授

「メディアアートの学校」として知られてきた IAMAS における、そのメディアアートを支えてきた中心的存在、安藤泰彦先生が退官される。「支える」とはまず第一に、[KOSUGI + ANDO]としての多彩な作家活動の成果のことであるが、数多くの学生を育ててきた教師としての安藤先生の大きさのことでもある。芸術（アート）とは何かを、歴史も含む幅広い知識と豊富な経験から教えるだけでなく、アートが「今、ここに生きているあなたと一体どんな関係で結ばれているのか」、それこそを考え抜くと安藤先生は学生に伝え続けてきたように思う。それはまさに、安藤先生のプロジェクト名から言えば「アートで考える」という姿勢、言い換えれば、現代社会における私たちの「生き方」のことであり、目新しいアートの定義ではない。そして、そのような安藤先生の姿勢の背景にある「高度なテクノロジーを前提とした現代社会に対する強い危機感」にばくはいつも

共感してきた。そのような意識はまた、ばくだけでなく専門の異なる他の教師や学生たちにも見えない形で拡がり、IAMAS の健康な「真面目さ」を支えてくれたのだと今更ながら思う。そう思うと、在任中に発表された[KOSUGI + ANDO]の作品群は、作家単独の活動であると同時に、みずから「師匠の背中」を学生たちにみせる覚悟いや、愛情を持ったものだったに違いない。今年の IAMAS 展と同時に開催された退官記念展示に多くの卒業生が集まったのも、かつて彼らが、作品では批評的で厳しい表現も辞さない安藤先生その人の、いつも穏やかで温かい眼差しに守られながら多くを学んだからだろう。

さらに、IAMAS には忘れられない安藤先生によるもうひとつの「作品」がある。安藤先生が総合監督を務めた「岐阜おおがきエンナーレ」である。2013 年の「LIFE to LIFE 生活から生命へ―生命から生活へ」、そして 2015 年の

「Cracks of Daily Life 日々の裂け目」は、学外も含め多くの作家たちの作品展示全体が安藤先生の問題意識を様々な角度から表現した「作品」だったと思う。何よりこの展覧会全体がやはり、[KOSUGI + ANDO]が抱き続けてきた現代社会に対する「危機感」を明確に映し出す、社会へ向けたメッセージであり、まさに「アートで考える」ことが IAMAS 全体で実践され、それが社会と共有される好機だった。

今後 IAMAS は、そのような安藤先生の「支え」なしでやっていけるのか今はとても不安だが、安藤先生が刻み込んでくださった DNA、すなわち、節度を失い、単なる効率や見かけだけの正義ばかりが求められるこの社会の中で、アートを鑑賞や考察の「対象」としてではなく、ばくたちが生きていくための実践そのものとして捉える姿勢、すなわち「アートで考える」は、卒業生たちの活動はもとより、未来へ進む IAMAS にこれからも生き続けるだろう。

科学と芸術の間で

小林 孝浩

情報科学芸術大学院大学 教授

安藤先生といえば、自作による機構や電子回路を中心に据え、現代社会に対する問題提起をふわっと纏わせ、作品に仕立て上げられておられるという印象を持つようになっていた。つまり、私としてはその裏側にある

メカや制御に強い興味を惹かれていたのだ。例えば2010年、京都での個展「Moderate Falling」では、プロジェクトを上下させる独自機構は印象的であった。先生は日常でも、興味深い技術を見つけては「作品で使えるのではないか」というまなざしで見つめられている。そういった技術に対するフットワーク

の軽さに、いつか協働できればと感じていた。これまでに安藤先生とご一緒した授業やイベントを思い起こすと、まずはIAMASの通過儀礼ともされる「モチーフワーク1」にき

かのぼる。2009年は「ヒト＝機械 連結体による表現」、そして連続して2010年に「地図作成術 マップからサイトへ」であった。当該授業、このころ通常は毎年教員が入れ替

わっていたが、気がづけば、安藤先生とで連続して担当していた。個人的には、テーマ発想から授業進行まで、心地よく進められていたように思う。

作品の共作という点では、2015年の岐阜おおがきビエンナーレにて実現した。赤松先生の作品《Time and Sapce Machine1》で、iPhoneを床から9mの天井まで上下動させる機構実現に協力して欲しいと、お声がけがあった。その時点でひと月ほどしかなかったため心配であったが、安藤先生も参戦いただけることになり安心して引き受けられた。私は巻き上げ機構の製作を担当し、先生は電子回路と無線を介した制御部分を担当された。ビエンナーレの総合ディレクターを務められお忙しいなか、試作をすんなり終えられ、日頃から技術に触れられていることを強く感じた。

この年から4年連続して、山田先生とともに情報学基礎の授業を担当いただいた。2015

年と2016年は人型ロボット Pepper を用いた授業であった。特に初年度は授業開始までに Pepper が届いておらず、外部に協力を求めるなど手を尽くしたことが思い出される。

2017年は「あそび」がテーマであった。加速度センサー内蔵の無線モジュールを使うことが要件であった。2018年は音具。サーボモーターとステッピングモーターの利用を前提としたものであった。2016年と2017年は園児を対象とし、実際に幼稚園等での実演を伴った。先生に加わっていたただけで、それまでの工学的知識を問う内容から、制作の意図までを問うような広がりを持たせられた。

これまでずいぶんとお世話になってきたが、発想から制作までの過程を間近で見られたことで、私自身の勉強にもなった、はずであると思っている。安藤先生には感謝をお伝えするとともに、また「人と技術の関係」について議論できればと楽しみにしている。お疲れさまでした。ありがとうございました。

穏やかな毒

小林 昌廣

情報科学芸術大学院大学 教授

穏やかな人であるが、ときどき毒も吐く。だがそのこともすぐに忘れてしまう。だが、ユニット KOSUGI+ANDO によってつくられる作品には、そうした「穏やかさ」や「毒」は存在しない。

周到に調査された結果をもとに、緻密につくりあげられた、まるで人の住めない建築物のような作品群（人の住めない構造物を「建築」と呼んでいいのだろうか？）を前にしたわたしたちは、ただたじろぎ、佇み、そして放心する。つまりは、鑑賞者の意識はつねに漂い、分散されてゆくのである。どこへ？ それはもちろん作品の彼方へ、である。KOSUGI+ANDO の作品は、一定の主題を激流のなかへと解き放つ（その激流を「最新のテクノロジー」などと呼んでもいいだろう）、そして、主題がしだいに漂白され、洗練され、主題以前であった問題へと、鑑賞者を引き戻すのだ（洗濯物の汚れが落ちる過程が楽しくてずっと洗濯槽をのぞいているのが

好きな人もいるだろう）。KOSUGI+ANDO の作品は、一見静謐な空間に置かれた物言わぬオブジェの集合体に思われるかもしれないが、主題を、鑑賞眼を、そしてアートの世界を攪乱する。「作品はひとつの入口であり、同時にどこか別の場所にシフトさせる装置である」と、安藤先生は最終講義で云われていた。それはもちろん物質的な問題ではなく、観念的な問題であり、現代アートに見られがちな物質的恍惚を乗り越えた観念的飛翔の可能性を述べていたのであろう（たぶん）。主題は、臓器移植や遺伝子操作や代理母（未完）など、人の身体と生命をめぐる問題から始められ、作品の視線は一気にオスブレイの轟音が響く沖縄へ、そしてガイガーカウンタの音だけが聞える福島へと拡張される。プロジェクトで学生たちと一緒に読んだり観たりした書物や映画においては、中東や韓国に対する強い関心と深い分析があった（これらの「成果」が作品へと変容するであろうことを期待

しよう）。要するに「生命」がテーマであると断じてしまえば直截すぎるのであるが、そんな曖昧模瑚としたものではなく、わたしたちの生命を覆い、操作し、抑圧している社会や政治の問題をこそ強力に扱っているのだといたい。KOSUGI+ANDO は、昨今のエンターテインメント優位のアートの世界において、アートに社会性や政治性が内包されているのではなく、アート表現とは必然的に社会的・政治的表現の謂なのだということを、作品そのものによって教えてくれているのだ（その意味では安藤先生はすぐれたアーティストであり、同時にすぐれた教師でもある）。そうした表現は必然的に鋭い両刃の劔となつて受容されたり批判されたりするだろう。だが、まずは作品の前で人は佇まなければならぬのだ。「穏やかさ」も「毒」もないと云ったそう、そこにあるのは「穏やかな毒」だったのかもしれない。それは私たちの生活というものに、あとになって効いてくるものなのだ。

「生存の技法」としての

前林 明次

情報科学芸術大学院大学 教授

メディアアート

安藤泰彦先生がディレクターを務められた「岐阜おおがきビエンナーレ 2013 LIFE 19 LIFE 生活から生命へ」は、私にとって忘れがたい展覧会になっている。その展覧会において私は《103.1dB》という音響作品を、当時の IAMAS 新校舎スタジオにおいて展示した。これは沖縄の普天間基地や嘉手納基地周辺でフィールド録音された 100dB を超える米軍戦闘機による騒音を忠実に再現し、鑑賞者が体験するというものであった。

当時、私は Ambisonic 方式という新たな立体音響システムを使い始め、このシステムがもつポテンシャルをどのような「現実」の再現に应用できるかを模索していたのだが、沖縄の基地周辺の騒音被害を伝えるニュースに接したことをきっかけに現地に

出かけ、フィールド録音をおこなった。持ち帰った録音をそのシステムで再生してみると、空間的なリアリティを伴った戦闘機の「耳をつん裂く」音響が再現された。

このような「音響作品」を、どのような場で、どのようなコンテクストにおいて提示できるか見当がつかないままであったところ、安藤先生から「岐阜おおがきビエンナーレ 2013」での発表を促していただき、参加することになった。その理由について私が事後的に理解したのは、私たちの社会の「外部」へと押しやられてきたものを「内部」に引き入れる装置としてのアートや展覧会というものがあり、メディアアートは、私たちの社会にとっての目や耳の機能を果たし得る、ということであった。安藤先生は「岐阜おおがきビエンナーレ 2013」を、そのよ

うな場として構想されていたのだと思う。

言うまでもなく、その 6 年後となる 2019 年の日本の社会においては、メディア、つまり私たちの社会の目と耳であるところのメディアの力は明らかに弱まっている。しかし、見たくないものは見ないという自己防衛機能に穴を開け、私たちの意識をより広い世界に開くための仕組みとしてのメディアは、私たちが生き残っていくために常に必要とされるはずである。その意味で今後、メディアアートは、生存のための技法（＝アート）としての側面をますます強めていくのかもしれない。

安藤泰彦先生には「IAMAS での教育指導、社会とアートをつなげる取り組みなど様々な活動を通じて多大なる示唆をいただいたことに改めてお礼を申し上げます。

拝啓、安藤先生

アン・セビン

情報科学芸術大学院大学 第17期生

安藤先生との思い出を1000字に収めるにはとても足りません。本を一冊書くこともできるのではないかと思うぐらい書きたいことがたくさんありますが、ここでは一番記憶に残っている大切な話を書きたいと思います。

いつか、IAMAS 17期の安藤会（会長：セビン、副会長：野呂君、書記：小寺君）が安藤先生の家に伺ってバーベキューをしたことがあります。私はお肉が大好きで、お肉を食べることに集中していました。そうしたら安藤先生が、「来年は、もう学校にはいないからね。」と話すのを聞き、私はお肉どころではなく、すぐくびっくりしました。しかし、他のみんなはもう既に知っていて、知らなかったのは自分だけでした。ということでその日のバーベキューは絶対に忘れられません。

修士2年の時は一週間に一回、面談をするために先生の研究室を自分の部屋のように出入りすることになりました。作品を制作することにあたって、何か疑問ができたらずぐ面談をお願いしました。実は、面談の準備が全然できていない状態でも「何もしていない状態」を報告するために先生の研究室に遊びに行きました。面談は平均2時間ほど行っていました。1時間は今後の研究と作品について、また、残りの1時間は雑談と韓国の歴史、文化などの話をしました。最初のうちは自分から色々話しましたが、最近では、韓国人である自分より安藤先生の方が韓国に詳しくなっている気がします。特に安藤先生から、私も知らない韓国の話を聞くと、すごく不思議な気持ちになりました。尊敬心を感じました。自分の周りでは一番韓国に詳しい日本人ではないかと思えます。

先生の作品を始めてみたのは京都での展示でした。迫力のある作品だと思いました。作品を鑑賞した瞬間、何だと定義づけることは難しかったですが、その分長い時間を考えさせ、家に帰る電車の中でも考えさせる作品でした。そして、その作品を見た後から、自分の作品の方向性と形態に対してももう一度考えるようになりました。

安藤先生には感謝の気持ちでいっぱいです。先生が、「留学生だから大丈夫ということはないよ。」とおっしゃってくれたように、私のことを韓国から来た留学生という感覚ではなく、IAMASの一人の学生として接してくれたのはいつまでも忘れません。2年間本当にありがとうございました。もちろん、これから作品と研究について相談したいので、ずっと連絡します。私の中では先生はまだ引退していません。

謝辞

山田 聡

情報科学芸術大学院大学 第12期生
産業文化研究センター 研究員

修論で謝辞を書いていなかったの、改めて書きます。こんなことを書くに安藤さんは嫌がるかもしれないが、やはり書かなくてはいけないと思うので書きます。

M2のころ安藤さんとの面談ではいつもふわふわした話をしていた。最近見た映画の話だったり、今読んでいる本の話だったり、考えてもどうにもならない抽象的な話だったり。もちろん制作や研究についての話もしていたが、大半がふわふわした話だった。最近見た作品の話（画面内画面を扱っている絵画の話だったと思う）をしているときに、安藤さんは「そこまで美術のことを信じていない」と言っていた。制度としての美術は信じてないけど美しいものは信じてる、的なことを言っていたような気がする。

なんの話をしているときか忘れてしまったが、P・K・ディックの『ヴァリス』を読んだら？と言われた。M2の12月、5年付き合っ

た彼女に振られ、悲しくなってしまう論文が書けない状態になっていた。それでも何かを書かなければと思い、引用や参考文献がある辞世の句のようなものを書いていった。論文の話をしなければいけないのに、透明人間になりたいあの、バラレルワールドに行きたいあのふわふわした妄言を吐いていたように思う。その時は『ヴァリス』は読めなくて、後に修了してから読んだ。当時は、なんで安藤さんがこれを勧めてくるのかわからなかったけど今ならなんとなくわかる気がする。

M3の2月末の修了が差し迫ったころ、LMAの事務局から「学費を払ってくれないと修了させることはできない」とのお達しがあった。夜勤でその日の生活費を稼ぎ、仕事帰りに朝日を浴びながら金麦を飲む自堕落な生活をしていたので、当然のように家賃も滞納しておりギリギリの生活をしていった。とて

跡的に就職先が決まり引っ越し代も捻出しないでほならない状況で、にっちもさっちもいかなく八方塞がりだった。

姉からお金を借りても足らなく、永作博美か阿部寛、どちらから借りようか真剣に悩んでいた。安藤さんに相談したところ「利息がつくのが馬鹿らしい。なんなら貸そうか。」と言ってくれた。このときほど、情けなく、申し訳なく、ありがたく感じたことはなかった。姉から借りたお金と安藤さんから借りたお金を合わせたらなんとか授業料が払える額になり、傷を負ったものの修了することができた。

感謝すべきことは色々あるが、この時ほど「血を分けてもらった」と感じたことはなかった。今僕が生きているのは大げさではなく本当に安藤さんのおかげです。いつか僕も人にいろいろ貸せるような人間になります。

安藤先生について

八嶋 有司

情報科学芸術大学院大学 第10期生

1. 私は大きく分けて、2つの期間で安藤先生にお世話になっている。学生としてIAMASに在学した期間と、研究員としてIAMASで働いていた期間だ。関西の大学で映像表現を学んだ私は、もちろんアーティスト「KOSUGI + ANDO」のことを知識としては知っていたが、

何を発見し、どのような方法をもって大垣の風景へアプローチするのか。それぞれの眼差しが交差するところで安藤先生は煙草をふかしながら思索しているように思った。

安藤先生のごことは全く知らなかった。IAMASに入学した春、安藤先生は大垣の街を歩き回ったり、原付きバイクを走らせたり、街中の様々な場所をリサーチしていた。それは、その夏に開催される「岐阜おおがきビエンナーレ2008」の展示企画「大垣ふうけい論」のためのリサーチであることを、旧IAMASの新校舎西側の入り口にあった喫煙スペースで教えてもらった。深く煙草を吸いながら話す安藤先生の姿をとっても良く覚えていた。ただ作品を展示させてもらえる場所を探すということではなく、「大垣ふうけい論」というタイトルが示すように、作品がその場所で展開されることによって、大垣の風景にどのように作用するのか、地域の方々がどのように作品を受け止め、日常の風景に取り込むのか、また、招聘されたアーティストが、

2. 私はStudio1の学生で、安藤先生はStudio4の先生だった。思い返せば、学生だった頃は、同じStudioの先生のように頻繁に話を伺うことは少なかったと思う。喫煙スペースで出会うことは多くあったが、かといって、そこでよく相談に乗っていたかというところという訳でもない。喫煙スペースで見かける安藤先生は、決まって何かを考えながら煙草を吸っているように見えた。考え事をするために、

外の喫煙スペースにきていたのではないだろうか。右手に煙草を持ち、左腕は右腕の肘を支えるようにして、煙草の煙をくゆらせていた。考えごとをする先生の姿を前に、学生の私から簡単に話しかけることはできなかった。安藤先生は、自分の研究室でも煙草を吸っていた。修了研究について面談をお願いした際に、「ここで吸うてもええよ」と勧められたことがある。私は恐縮しながらも勧められるがままに煙草を

吸ったが、先生の研究室であるということからか、何か悪いことをしているような気がして、緊張のせいか美味しく煙草を吸えなかった。面談ではジャック・デリダの「尖筆とエクリチュール」を紹介され、より頭を悩まされた。私の修了作品について、当時、唯一、安藤先生に高く評価していただいていたように記憶していた。しかし、一年ほど前だったか、安藤先生にその話をしたら、私の修了作品のことを覚えてくれてはいたが、「あの作品のことをあまり良いとは思っていないかったので、評価はしていないと思う」とおっしゃられた。記憶とは恐ろしいものである。

3. 恐らく「表現工学リテラシー」という授業だったと思うが、安藤先生は「表現工（光）学リテラシー」と読み替えていた。ジェームズ・J・ギブソンの「生態学的視覚論」を引用し、ヒトや動物がどのように世界を知覚しているのか、また、世界から私たちはどのように知覚させられているのかを「包囲光配列」や「アフオーダンス」を紹介しながら教えてくれた。それは、私にとって、あたりまえのことのように流

れていく日常(世界)に対して、あたりまえだ
と知っていることが、「あたりまえではない」
ということを発見する面白さだと感じた。それ
は、表現すること、作品を作ることと同じよう
な感覚ではないだろうか。別の授業では、ラン
ド・アートや、アース・ワークを取り上げ、ア
ンディー・ゴールズワージー、ベルント&ヒラ
ベツヒャー、ハミッシュ・フルトン、リチャード・
ロング、ロバート・スミッソンなどを紹介され
た。ある意味で守られた場所である美術館やホ
ワイトキューブで展開される作品ではなく、外
の世界に晒され、場所と密接に関わり持つよう
な、ときには自然や生活と地続きに存在し、作
品を通じて再び何があるのかを見せる作
品である。アンディー・ゴールズワージーの
“The work is the place” という言葉は今でも心
に残っている。

4. 場所と作品の関係について、安藤先生か
ら学んだことが多くある。研究員として関わっ
た「岐阜おおがきビエンナーレ2013、2015」
では実践から学びを得た。キュレーターではな
く、アーティストが作る展覧会がどのようなも
のなのかとても知りたかった。安藤先生は出版
作家のセレクトから、展覧会の構成まで、ほと
んど全てを行った。2013年は「Life to Life」
というテーマのもと展覧会を構成していたが、
それとは別に、来場者の道線で「空界」「下界」「地

界」と物語が作られ、それぞれの場所に応呼す
る形で作品の配置が設計されていた。2015年
は「日々の裂け目」がテーマだったが、会場の
構成においては、日が昇りまた沈んでいくよう
な、日々の時間の流れが盛り込まれ、明るい場
所から暗い場所へ繋がるような設計がなされて
いた。ビエンナーレは複数のアーティストが作
品を発表する展覧会だが、おおがきビエンナー
レという展覧会そのものが、安藤先生の作品の
ように思えた。

5. IAMAS がソフトピアに移転したとき、
センタービル3階のギャラリー2の床に、2×
2×1mぐらいの大きな穴が空いていた。事務
局の方が「この穴はどうしましょうか」と話し
ているとき、安藤先生は、その穴を見て「これ
ええなー、こういうのを使ったインスタレー
ションが出てきたら面白いと思うわー」「この
まま残しときましょ」と話されていた。しか
し、4月の授業が始まるとすぐに、危険だとい
う理由でバレットや箱馬が詰められて、その穴
は塞がれた。2015年のビエンナーレが終わっ
た頃だっただろうか、安藤先生は予算が余った
か何かで、ギャラリー2を使いやすくなるとい
う理由で、リノリウムシートの床材を敷くと
おっしゃった。つまり、安藤先生自ら、床の穴
を完全に塞いだのである。月日が流れて、この
ような経緯があったことすら私も忘れていた。

しかし、つい先日、安藤泰彦教授退官記念展示
「Sleepless Babies 2019 ― 眠れぬ子らのため
に」を見て、これら全ての記憶が蘇ったのだ。
そこにはギャラリー2の穴を活用したインス
タレーション作品が展開されていたのである。
移転から5年も経っている。安藤先生に確認
したら、先生はこの出来事を忘れられていた。
しかしこれは、この場所をいつか活用してや
ろうと心の底にずっと持ち続けていた結果に
違いない。きっとそうである。

まだまだ、書ききれないぐらい書きたいこ
とがある。数年前から、私は安藤先生の家に
生る柿の収穫を手伝っている。収穫作業が人
間の本能を刺激するのか、無心になって、柿
を採っては、籠に詰める。いっぱいになっ
たら運ぶ。安藤先生は、運ばれた柿を大きさや
熟れ具合を確認しながら仕分けする。それを
繰り返し。疲れたら休憩し、世間話や、近況
の報告などをさせていただく。どんな作品を
作っているとか、次はどんな展覧会に参加す
るなど。硬い作品の話だけではなく、生活全
般の話をする。どつちのハサミが切れるとか、
どんな島に行きたいとか、岐阜の大仏の角度
が面白いとか、色んな話をする。安藤先生の
柿は、とても甘くて美味しい。できることなら、
今年も来年もこれから先も収穫に行かせてい
ただきたい。

安藤 泰彦

現代美術作家 [KOSUGI+ANDO]
情報科学芸術大学院大学教授

1953年、滋賀県大津市生まれ。

京都大学理学部生物学科を卒業後、京都市立芸術大学美術学部に入學。西洋画科構想設計卒業。

1983年より、アートユニット「KOSUGI+ANDO」（小杉美穂子・安藤泰彦）として、二者間の対話によって生み出されるインスタレーション作品を制作。物語、記憶などをモチーフに、観客がその歩行によって読み進める迷路状あるいは舞台装置的なインスタレーションを制作。

90年代、インスタレーション空間に映像、音響が加わり、コンピュータで制御された時間的変化をもつ空間を制作。臓器移植や原子力発電の問題など、現代のテクノロジーが人の生や死と関わるテーマが現れる。

1999年より、吉岡洋（美学）、伊藤高志（映像）、稲垣貴士（音響）とのコラボレーション「BEACONプロジェクト」を開始。また京都において「SKIN

「DIVE」を始めとする展覧会を企画・運営する。

2011年3月11日の東日本大震災を契機に、あらためて現代のテクノロジーと人の関わりに焦点をあて、社会的問題を日常の生活の中から問い直す作品制作や展覧会企画を展開する。

作品展示・企画 2007年～2019年（IAMAS在職期間中）

- 2008 展覧会企画：展示企画「大垣ふうけい論」、『岐阜おおがきビエンナーレ 2008 流れる』、大垣市内各所
- 2010 KOSUGI+ANDO：『Moderate Falling 穏やかな落下』、ギャラリー 16、京都
- 2010 BEACON：『BEACON 2010』、『メディア芸術文化祭京都展』、京都芸術センター
- 2011 KOSUGI+ANDO：『Second Burial 二番目の埋葬』、夢創館（神戸）
- 2011 KOSUGI+ANDO：『Transition State 遷移状態』、CAS、大阪
- 2013 展覧会企画：『岐阜おおがきビエンナーレ 2013 LIFE to LIFE』、総合ディレクション、旧 IAMAS 校舎
- 2014 BEACON：『BEACON 2014 memento』、『パノラマ・プロジェクト』、葬送空間スペースアデュール、東京
- 2014 BEACON：『BEACON 2014 in flux』、『パノラマ・プロジェクト』、旧立誠小学校、京都
- 2015 BEACON：『BEACON 2015 Look Up!』、『IAMAS アーティストファイル # 3』、岐阜県美術館
- 2015 展覧会企画：『岐阜おおがきビエンナーレ 2015 Cracks of Daily Life』、総合ディレクション、ソフトピア・ソピアホール
- 2017 KOSUGI+ANDO：『Sleepless babies 眠れぬ子らのために』、ギャラリー 16、京都
- 2018 KOSUGI+ANDO：『I WANT YOU あなたが欲しい』、ギャラリー 16、京都
- 2019 KOSUGI+ANDO：『Sleepless babies 2019 眠れぬ子らのために』、ソフトピア・センタービル・IAMAS ギャラリー 2

Past and Present

—IAMAS 時代を振りかえって、そして…

安藤泰彦教授 退官記念

企画・編集

金山 智子・山田 聡

抄録編集

山田 智子

デザイン

野呂 祐人

撮影

嶋田 元菜妃

発行

情報科学芸術大学院大学

印刷

産業文化研究センター
株式会社グラフィック

2019 年 3 月 発行



UN AUTHORIZED ENTRY PROHIBITED
NOT TO BE TOUCHED
AND PUNISHABLE BY JAPAN LAW
KUBOYAMA & STEEL